

569-142



1200501517401

569

142

改造文庫

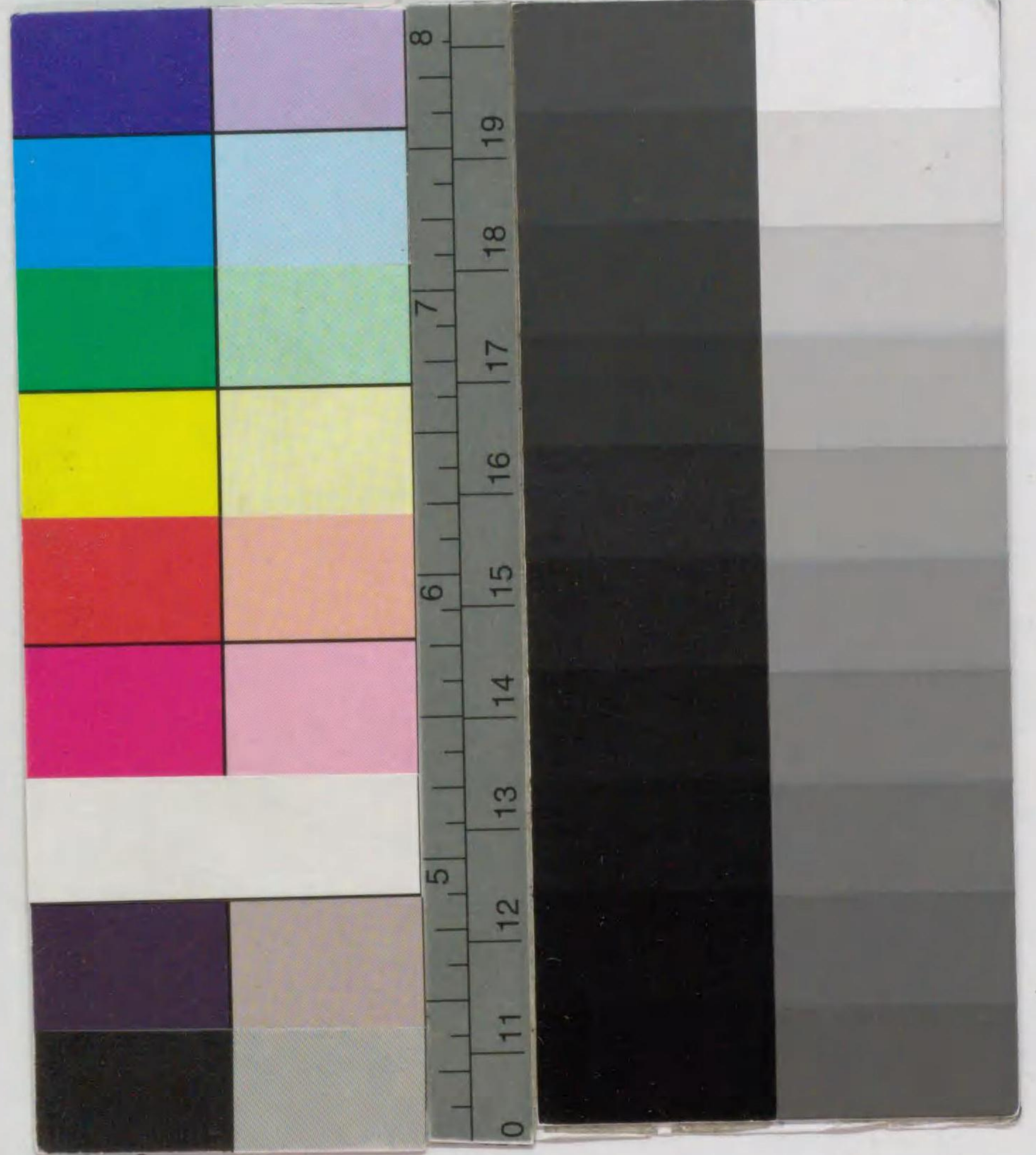
第二卷 第六十一號

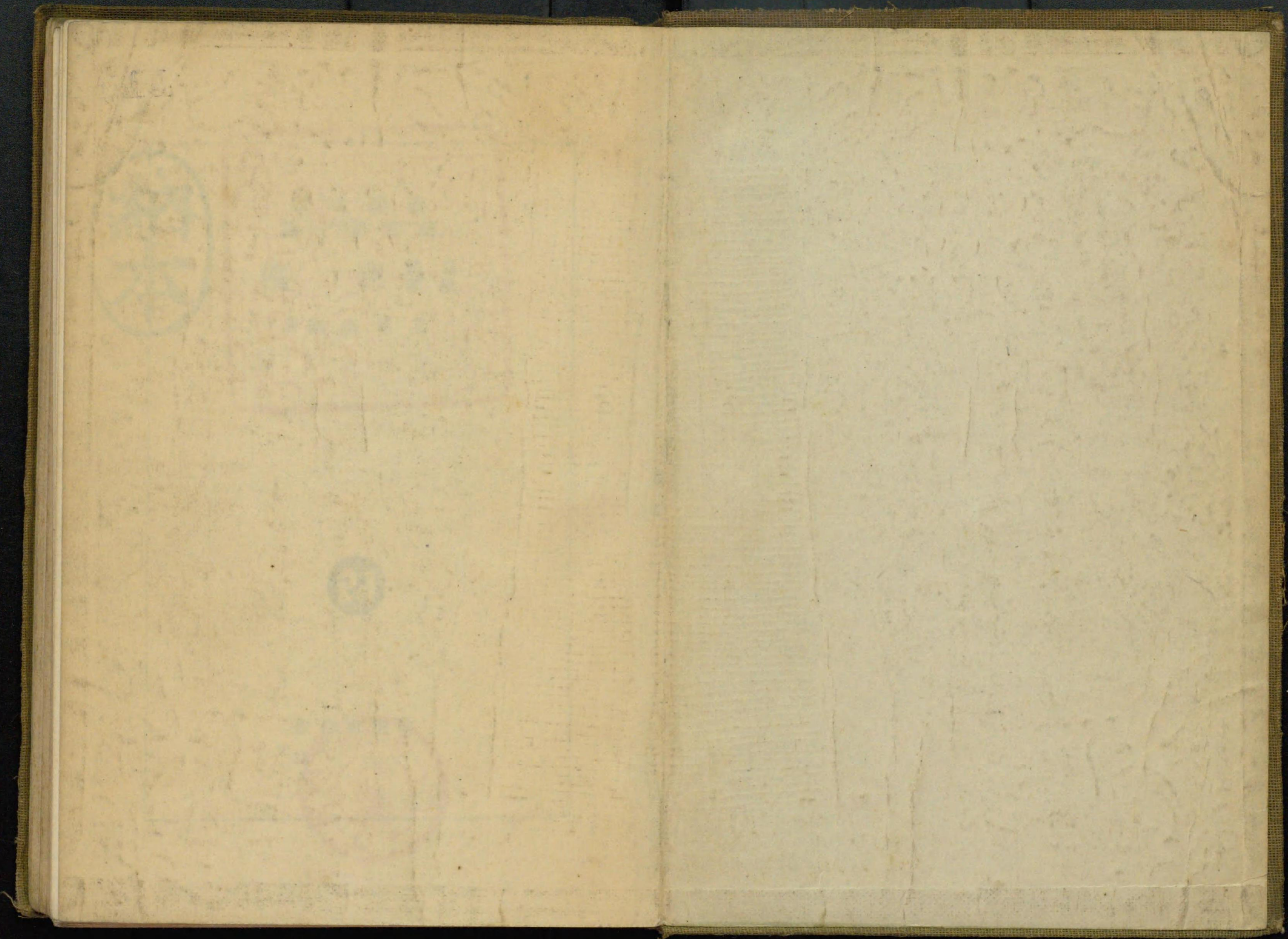
白雲歌集

花 橙

北原白秋著

改造社出版





納本

改 造 文 庫
第 二 部 第 六 十 一 篇
自 歌 選 集
北 原 白 著
花 檉

24

改 造 社 出 版

五 五 社 圖 章

569-142

3

花 檉 目 次

桐 の 花 (自明治四十二年
至大正元年) 五

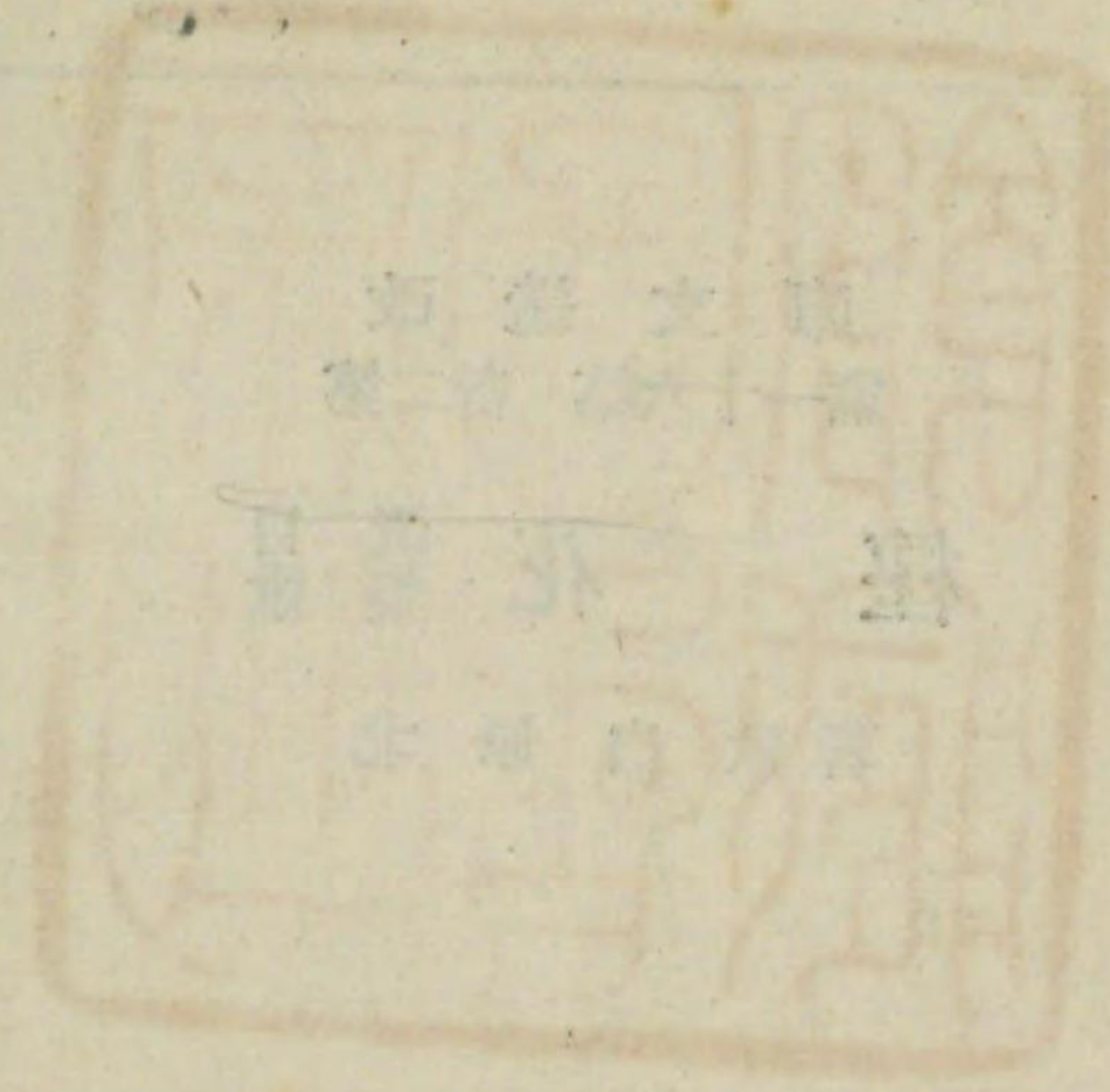
雲 母 集 (自大正四年
至大正二年) 六五

輪 廻 三 鈔 (自大正三年
至大正七年) 一三三

雀 の 卵 (自大正四年
至大正七年) 一四九

葛 飾 閑 吟 集 (自大正十四年
至大正十年) 一八九

—— 錄 百 九 首 ——



541-103

春の歌集 (大正四年) 一冊百六頁

—— 一冊百六頁

書の眼 (大正四年) 一冊百四頁

—— 一冊百四頁

前編三巻 (大正四年) 一冊百三頁

—— 一冊百三頁

遊詩集 (大正四年) 一冊百二頁

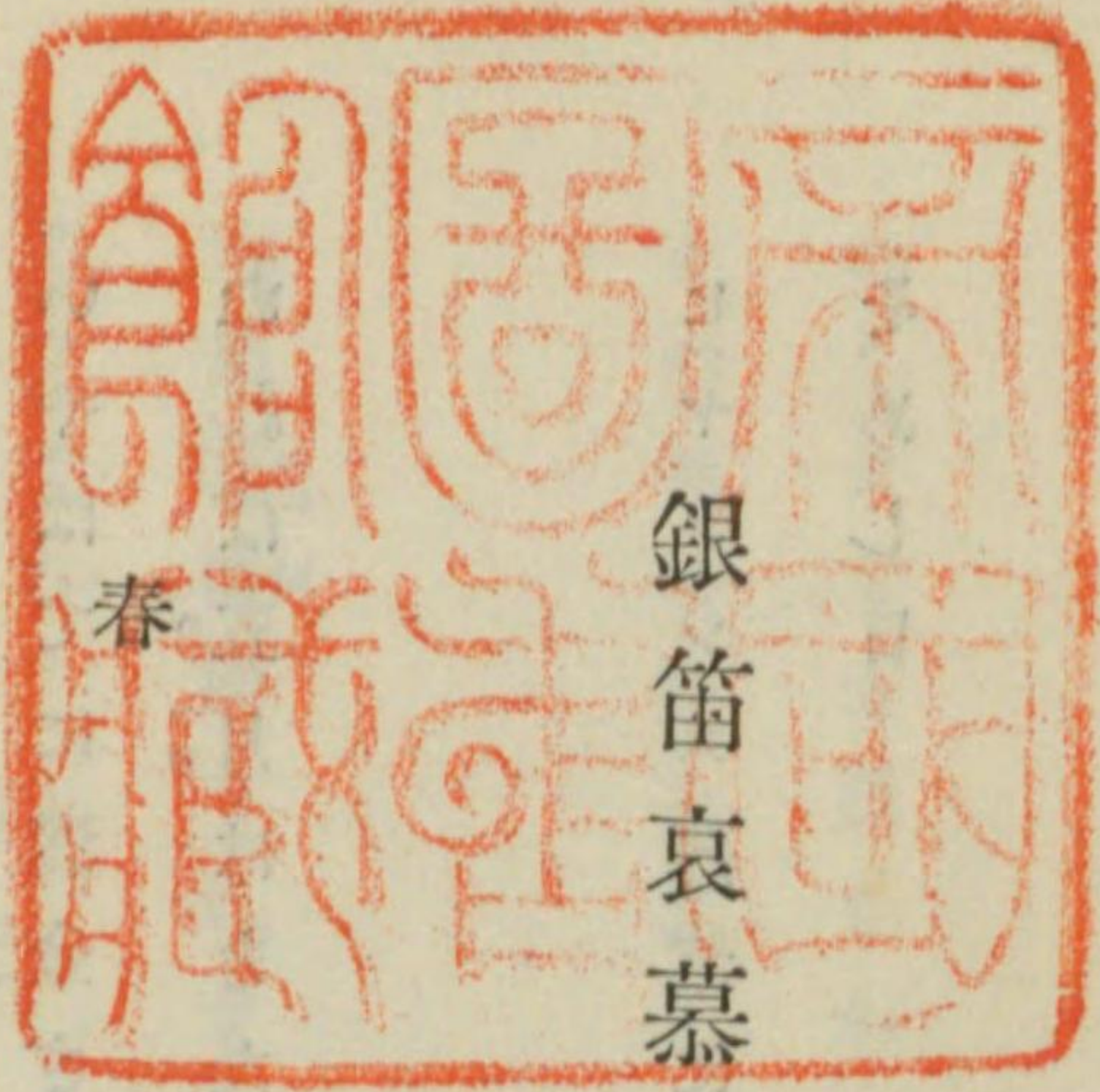
—— 一冊百二頁

蘭の詩 (大正四年) 一冊百一頁

詩集目次

『桐の花』より

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草
に日の入る夕べ



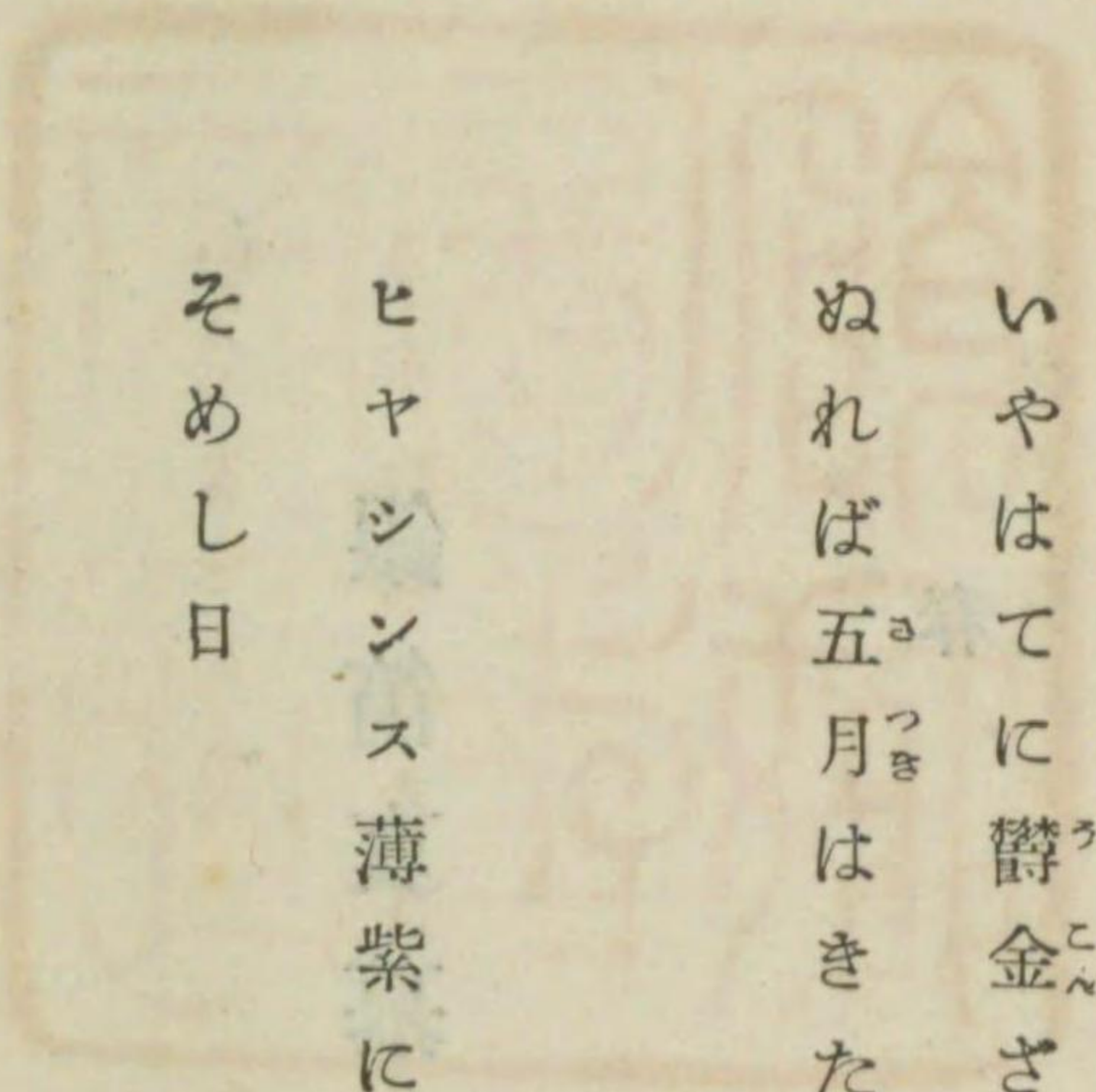
銀笛哀慕調

春

銀笛のごとも哀^{かな}しく單調^{ひとふし}に過ぎもゆきにし夢
なりしかな

いやはてに鬱^う金^{こん}ざくらのかなしみのちりそめ
ぬれば五月^{ごつき}はきたる

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫^{ふる}ひ
そめし日



かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひ
との春のまなざし

南風薔薇^{さうび}ゆすれりあるかなく斑猫^{はんめねこ}飛びて死ぬ
る夕ぐれ

凋^{しを}れゆく高き花の香身に染^しみつ貧しき街の春
の夜の月

寝てきけば春夜しゅんやの音いろ泣くごとしスレート
屋根に月の光れる

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬にや
ますめぐるも

夕暮のとりあつめたる露のうちしづかにひと
の泣く音ねきこゆる

いつまでか春は木末にとどまらむ風吹きあつ
る青梨のはな

行く春の霞け遠くなりけりきのふは君が眼め
も燃えにける

ゆく春の喇叭はふの囃子はやし身にぞ染む造花つくりばなちる雨の
日の暮

美しき「夜」の横顔を見るごとく遠き街^{まち}見て心
ひかれぬ

美しき「夜」の横顔を見るごとく遠き街^{まち}見て心
ひかれぬ

夏

郷里柳河に歸りてうたへる歌

廢れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏め
ば春たけにける

枇杷の木に黄なる枇杷の實かがやくとわれ驚
きて飛びくつがへる

大き枇杷もぎておとせば吾弟らが麥藁帽にう
けてけるかな

馬鈴薯の花咲き穂麥あからみぬあひびきのご
と岡をのぼれば

黒鷓野邊にさへづり唐辛子いまし花さく君は
いづこに

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこ
し畑の黄なる月の出

葉のとちてほのくれなるの合歡のはなにほへ
る見ればをさな夕合歡

水のべにいまだをさなき合歡の花ほのけく紅
く君も眠なむ

過ぎし日のをさな遊びの土の鳩吹きて鳴らさ
な月のあかりに

まだ明^{あか}る釣鐘草の夢ならむ夕とどろきの遠く
きこゆる

汗あゆる夏のゆふべはすがすがし葦の葉卷き
て吹くべかりけり

ふるさとの麥の刈穂^{かりほ}のい寝ごこち幼な遊びの
聲もほめぎぬ

都^{みやこ}べへ立たむ日近し菱賣^{ひしうり}の向脛^{むかひか}黒く秋づきに
けり

秋

人のこひしき
日の光金^{カナ}絲^リ雀^ヤのごとく顫ふとき硝子に凭^よれば

冬

十一月北國の旅にて

葦^{あし}崎^{さき}の白きペンキの驛標に薄日のしみて光る
さみしさ

久留米旅情の歌

日も暮れて櫛^{はじ}の實採^とりのかへるころ廓^{くわ}の裏を
ゆけばかなしき

初夏晩春

公園のひととき

手にとれば桐の反射の薄青うすあせき新聞紙こそ泣か
まほしけれ

山羊の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹
いて夏は来りぬ
草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝
て削るなり

横向きてほのかに黒き下したまぶた若葉あかりに
君は疲れぬ

ああ五月さつき螢あせ匍はひいでヂキタリス小ちさき鈴かねふる
和魂にぎたまの泣なく

郊外

きさくなる蜜蜂みつばち飼養者かかが赤帯あかおびの露西亞ろしあの地主ぢぬし
に似たる初夏

太葱ひとくきの一莖ひとくきごとに蜻蛉せみゐてなにか恐るるあか
き夕ぐれ

春の名残

一九一〇暮春三崎の海岸にて

一

いつしかに春の名残となりにけり昆布干場こんぶばしの
たんぽぽの花

野薊さげにさわ觸れば指おしやや痛し汐見てあればすこし
眼まなこいたし

鉋かんじと研ぐ濱の大工の指ゆびのさきしみみ光れり漣なみに
向むかき

春の夕暮

春の月ちさき時計の蠟ろう面めんに光る夜なりきかぢ
め焼やきぬし

二

ふはふはとたんぽぽの飛びあかあかと夕日の
光り人の歩める

「春」はまたとんぽぽがへりをする兒こらの悲しき
頬ほのみ見みつつかへるや

春の夕暮

薄明の時

放埒

アーク燈ともし點れるかげをあるかなし螢の飛ぶは
あはれなるかな

雪の下白く少ちひさく咲きにけり喜蝶が部屋の箱
庭の山

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほれほれ
と鳴ける品川

薄暮

夕ゆふあを青き微光の中をあがりゆく足長蜂は足を垂
らせり

あかしや

あかしやの花咲く見れば水の上にはかなき夏
の夢もやどりぬ

踊子

惱なやましく廻まはり梯子はしごをくだりゆく春の夕べの踊
子がむれ

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ぬる尻ふり
踊にしくものはなし

浅き浮名

一

戀すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつか
し白芥子の花

片戀のわれをあはれと鈴麥の花さく傍を通ひ
來にけり

二

わが世さびし身丈おなじき茴香も薄黄に花の
咲きそめにけり

茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれどきのこ
こちこそすれ

さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの
空に桐の匂へる

四

ほのぼのと人をたづねてゆく朝はあかしやの
木にふる雨もがな

蟾蜍の時

螢飛び蟾蜍鳴くなりおづおづと忍び逢ふ夜の
薄霧の中

河豚

河豚よ河豚よ汝は愚かし地に跳ねて沖津玉藻
の香のなげきする

花 檜

檜わかば月の光とけぶらへばいの寝ぬ鳥か身
じろぎつつも

花檜の香に眠ぬ鳥よほのけくは或は鳴きては
たや止みにし

路 上

春

いそいとと廣告燈も廻るなり春のみやこのあ
ひびきの時



水路

空見ればアークライト圓弧燈に雪のごと羽蟲たかれり春よ
いづこに

銀座

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にし
ばしかがやけ

おそ夏

折ふしのももの流行はやりのなつかしくかなしけれ
ばぞ夏もいぬめる

新橋

新しき勻なによりうらがなし勸工場のぞく五
月のころ

人力車じんりきの提灯かんばん點つけて客待つとならぶ河邊に螢
飛びいづ

雨のあとさき

一

新しき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨の
霽れ間はらを

あまつさへキヤベツかがやく畑はた遠く郵便脚夫
疲れくる見ゆ

二

入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の
黄なるかがやき

三

人妻のしみみ汗ばみ乳ちをしぼる硝子コ杯ツのふち
のなつかしきかな

四

君憎む夏の心のものづかれ茴香うゐきやうの花に凭よるも
あはれや

五

晝見えぬ星のころよなつかしく刈りし穂に
凭り人もねむりぬ

六

玉赤き蠟マツチする草のなかすでに螢の臭に氣ひ
むせべり

晝の鈴蟲

明治四十四年夏、蠣殻町の岩佐病院にて

麻酔の時

朝顔を紅あかく小ちさしと見つるいのち消えむとぞ
する鳴け鳴け鈴蟲

夕ぐれ

ほのかなる水くだもののにほひにもかなしや
心疲れむとする

立秋

長廊下いろ薄黄うすきなる水薬すゐやくの瓶ひとつ持ち秋は
來にけり

秋思

その一

松脂まつやにのほひのごとく新しくなげく心に秋は
きたりぬ

薄うすらかに紅あかく孱弱かよわし鳳仙花じんりき人力車りきの輪わにちる
はいそがし

下町はふらんねる織る手のさきのにほひ幽か
に秋立ちにけり

白き猫晝もさびしか花あかき百日紅ひゃくにちのぼり
ゐにけり

その二

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊の眼のご
と秋はなつかし

静かなる秋のけはひのつかれより櫻の霜葉ち
りそめにけむ

香ににほふ秋の日向の静ごころ茴香草も實と
なりにける

夕粘る羽蟲の線のあかあかと光るしばしを秋
もなづめり

菊の香に朝の日のさす飾り窓硝子のかげも花
に映れり

ひいやりと剃刀かみそりひとつ落ちてあり鶏頭の花黄
なる初秋

黒き猫しづかに歩みさりにけり昇菊の絃へと切れ
したまゆら

常磐津の連弾つれびきの撥はちいちやうに白く光りて夜の
ふけにけり

その三

百舌啼けば紺こんの腹掛はかけ新しきわかき大工も涙な
がしぬ

いらいらと葱の畑はたけをゆくときの心ぼそさや百
舌啼きしきる

その四

黄なる目に鏽^さびし姿^{すがた}見^み鏡^{かみ}てりかへし人あらな
 くに百舌啼きしきる

いつのまに黄なる葉となりちりにけむ青さい
 かちの夏の日のゆめ

わが友の黒く光れる瞳^{ひとみ}より恐ろしきなし秋ふ
 けわたる

春を待つ間

戯奴

ほこりかにとんぼがへりをしてのくるわかき
 道化に涙あらすな

冬のさきがけ

ふくらなる羽毛襟ホ卷マのにほひを新しむ十一月
 の朝のあひびき

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそ
 げばふる雲みぞれかな

電柱でんちゆうの白き碍子がいしに凍み細く雨はそそげり冬き
たるらし

雪

厨女くりやめの白き前掛まへかけしみじみと青葱の香の染しみみて
雪ふる

君かへす朝の鋪石しきいしさくさくと雪よ林檎の香の
ごとくふれ

屋根の雪暮れてひかれば三味線の棹をきゆう
きゆうと拭ぬぐく女なり

寂しさにきのふのぼりし観覧車今朝は廻らず
雪ぶりの中うち

早春

その翌朝よくあさおしろいやけの素顔吹く水仙の芽の
青きそよかぜ

みじめなるエレン夫人が職業なりはひのミシンの針に
しみる雨かな

沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそ
かなしかりけれ

細葱の春の光はいたいたし眞晝しみに小犬
交まかれる

ふくれたるあかき手をあて婢女はしためが泣ける厨くりやに
春は光れり

春よ春よひとり野に出て戯あそけゆく小さき老女
にしばしかがやけ

野に來ればおたまじやくしの尾は黒くすでに
水面みづの春ははずめり

りようりようとひとすぢの水ふき出でたり冬
の日比谷の鶴のくちばし(冬一首)

白き露臺

春愁

歎けとていまはた目白僧園の夕べの鐘も鳴り
いでにけむ

春はもや静ころなし愁はしきよき人妻のか
ほばせのごと

温かに洋傘の尖もてうち散らす毛茛こそ春は
かなしき

しみじみと二人泣くべく椅子の上の青き蜥蜴
をはねのけにけり

定齋の軋みせはしく橋わたる江戸の横網鶯の
啼く

鐸鳴らす路加病院の遅ざくら春もいましかを
はりなるらむ

夕かけて白き小鳥のものおもひ木にとまるこ
そさびしかりけれ

夜を待つ人

やはらかに赤き毛糸をたぐるとき夕とどろきの遠くきこゆる

事もなくけふのひと日もはてにけり赤きランプをまたとも点すなり

編みさしの赤き毛糸に刺す針の鉤かぎ針長しこほろぎの鳴く

松の葉の松の木の間をちりきたるそのごとほそきかなしみの来る

女友だち

どくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る
君がまなざし

『雲母集』より

力

くわうくわうと光りて動く山ひとつ押し傾かたむけ
て来る力はも

鱻

鱻^{ふかさめ}は大地の上は歩かねばただにごろりとこ
 がされにけり

大鴉

大鴉一羽渚^{なぎさ}に黙^もふかしろしろにうごくさざな
 みの列

寂光^{じやくわう}の濱に群^{むれ}れゐる大鴉その眞上よりまた一
 羽來し

一羽飛び二羽飛び三羽飛び四羽五羽飛び大鴉
 の群^{むれ}飛びにけるかも

卵

大きな手があらはれて晝深し上から卵をつ
かみけるかも

かなしきは春晝の上にくろがれる七面鳥の卵
なりけり

新生

水あさぎ空ひろびろし吾が父よここは牢獄ひとやに
あらざりにけり

不盡

不盡の山れいろうとしてひさかたの天の一方
に立てりけるかも

五月

魚さかなかつぎ丘にのぼれば馬鈴薯じやがもの紫の花いま盛
りなり

ある時は

ある時はおのが家内うちの晝寝どき盗人のごと足あし
音とひめにけり

ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山から
此こ方向らいてゐる

生きの身

麩^パ麩^ンを買ひ紅^ベ薔^キ薇^バの花もらひたり爽^{さわ}かなるか
も^リ兩^{りゅう}手に持てば

海雀

海雀つらつらあたまそろへたり光り消えたり
漣見れば



尊菜

戀しけど今は思はず尊菜の銀^{ぎん}の水^み泥^{どろ}を掌^てに掬
ひ居つ

人なればわれもまことに憔悴す尊菜光れこの
沼深く

明るさや寥しさや人も來ず裸になれど泣くす
べ知らずも

寂しけれどおのれ輝き頭うなかぶす膝までも深く
泥に踏み入りて

照りかへる薄すさ荊かる萱かやさみどりのひろびろし野に
今は出でつも

眼鏡橋

水の輪の耀きの揺れ緑ふかしひとり野菜をか
がみて洗へり

海外の濱

ふかぶかと人間笑ふ聲すなり谷一面の白百合の花

菖蒲園

ひとり来て涙落ちけりかきつばたみながら萎み夏ふかみかも

遊ヶ崎遊泳

ちちのみの父を裸になしまゐらせ泳ぎにとゆくその子が二人

狐のかみそり

しんしんと寂しき心起りたり山にゆかめとわ
れ山に來ぬ

狐のかみそりかたまりて赤し然れどもひとつ
びとつ見れば風吹けりけり

海光

海にゆかばこの寂しさも忘れむ海にゆかめ
とうちいでて來ぬ

傍こぎいでてあはれはるばる來しものか沖に立
つ波かぎり知られず

われと櫓をわれと禮拜をらむ心なりひとすぢに水み
脈をを光らしてゆけば

大きなる人あらはれて目の前に不意に舟漕ぐ
うれしさうれしさ

水 垂

水みづ垂たれの松のかげゆくあはれなり麗らなる日の
べら釣り小舟をぶね

水垂の岩のはざまに垂る水のせうせうとして
眞晝なりけり

地面と野菜

大きな足が地面ちべたを踏みつけゆく力あふるる
人間の足が

畑に出でて見ればキヤベツの球たまの列れつ白猫のご
と輝きて居る

地面べた踏めば蕪かぶらみどりの葉をみだすいつくしき
かもわが足の上

摩訶まか不思議しぎ思ひもかけぬわが知らぬ大きな
キヤベツがわが前に居る

ふと見つけて驚きにけりさ緑の野菜のかげの
大きな片足

はらら雑魚しづく投網をかいたぐり飛び翻る河
 かい手操る

燕の葉に濡れし投網をかいたぐり飛び翻る河
 豚を抑へたりけり

丘の立秋

片岡に粟と豆とが赤ちやけて深くささやく熟
 れにけらしも

泥豚

豚小屋に呻きころがる豚のかすいつくしきか
 もみな生けりけり

豚小屋の上の棕櫚の木の裂葉より日は八方に
かがやきにけれ

晝休憩

銀いろの燕かぶらの中に坐りたる面黒おもぐろの眼のみ大き
な娘

積藁のかけむくむくと湧きあがるパイプの煙
見つつ眞紅まっかな日にあたり居り

小さき青木

青木に犬の尿いぼりのしたたれりけり美しきかな小
さき青木に

目の前にしんじつかかる一本いっぽんの青木立てりと
知らざりしかな

黍
畑

三日の月ほそくきらめく黍畑きびはたけ黍は黍とし目の
醒めてゐつ

ほのかなる人の言葉に觸りたれば驚くものか
黍は夜ふけて

小夜ふけてほかに人こそ音すなれいづこの闇
を行けるなるらむ

さらさら袖にさやらふ夜の聲を唐黍の葉か
と思もひつつとほる

闇
夜

願ひ湧く心しきりに我にあり海の夜ふけの闇
のそよかぜ

二本の棕櫚

天の川棕櫚と棕櫚との間より幽かに白し闇
にけらしも

耳澄ませば闇の夜^や天^{てん}をしろしめす圖^はり知られ
ぬものの聲すも

棕櫚二本この夜天の吾が聲は幽かなれども
偽れなくに

何物の澄みて流るる知らねどもこの夜や天てんの
 繁しげき光はも

水邊の午後

鬱こゝろ蒼もりと楊柳やなぎかがやくまさびしき遠き入江に日
 の移るなり

漣なみさざなみ何が憂しとて鈍銀にぶぎんに暗くかげりて
 また照るものか

千鳥ゐるされどあかるきさざなみの銀ぎん無垢むくわう光
 に眼も向けられず

橋をわたりつくづくおもふこれぞこのいづこ
 より來し水のながれか

照りかへる銀のさざなみ河やなぎ白き月さへ
その上に見ゆ

水の邊に時にひろぐる網の目はこれ寂寥の眼まなこ
なりけり

この岬行き盡すまでいそがむと思ひきはめて
吾がたどるなり

二町谷小景

網の目に閻えん浮ぶ檀た金の佛ぶつゐて光りかがやく秋の
夕ぐれ

兩もろの掌てに輝てりてこぼるる魚のかす掬へども掬
へどもまた輝りこぼるる

落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬をい
ま放れたり

海の波光り重なり日もすがら光り重なりまた
暮れにけり

山中秋景

木々の上を光り消えゆく鳥のかす遠空の中に
あつまるあはれ

山峽に橋を架けむと耀くは行基菩薩か金色光
に

谷底に人間のごと戀しきは彼金柑の光るなり
けり

帆をかけて心ぼそげにゆく舟の一路いちろかなしも
麗かなれば

松並木なかに一點さびしきは金きんの茶店の甘酒あまざけ
の釜

二方ふたかたに晴れてかがやく秋の海みぎりひだりに
白帆ゆく見ゆ

金の星このもかのもの岨をゆく彼らは枯草負
ひたる童わらべ

引橋の茶屋のほとりをいそぐときほとほと秋
は過ぎぬと思ひき

庭前小景

春過ぎて夏來るらし白妙のところてんぐさ探
る人の見ゆ

ふくふくと蒲團の綿は干されたり傍そばに鋭き赤
たうがらし

今朝あげし鰻の籠はまだ濡れて紅ふかき松葉
菊の花

海光

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚た逃げ
ゆく眞晝の光

海底うみぞこの海鼠うまこのそばに海膽うたでをり日の照りとほり
影のしたしさ

しんしんと夕さりくれば城ヶ島の魚籠いけす押し流
し汐満ちきたる

漣

波つづき銀のさざなみはてしなくかがやく海
を日もすがら見る

網高く干せるその上の漣のかぎり知られねさ
ざなみの列れつ

麗かや此方こなたへ此方こなたへかがやき来る沖のさざな
みかぎり知られず

この風の海の平のさざなみは足跡つけて吾が
歩むべし

漣のかがやきの間まよしくしくに瞬き若くまた
光るなり

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる舟
の通るなるらむ

漁村晩秋

かくのごとき秋の簡素をわれ愛す枯木一本か
すかに光る

一心に遊ぶ子供の聲すなり明あかきとまやの秋の
夕ぐれ

油壺晚景

油壺から諸磯もろいそ見ればまんまろな赤い夕日がい
ま落つるところ

赤々と夕日廻れば一またぎ向うの小山を人跨また
ぐ見ゆ

種蒔

巡禮と野の種蒔たねまき人と春早し金色こんじきの陽に物言へ
りけり

夕ぐれの金色光の照るところ種蒔たねまき人三人さんにん背を
かがめたり

巡禮

照りかへる金柑の木がただひと木庭にいつぱ
いに日をこぼし居り

はるばると金柑の木にたどりつき巡禮草鞋わらぢを
はきかへにけり

遠樹抄

西方に金の遠樹ゑんじゆのただふたつ深くかがやく何
といふ木ぞ

かうかうと金の射光の二方ふたかたに射す野つ原に木
がふたつ見ゆ

閻魔の反射

芽の麥の畠はたけといはず崖といはず落日いりひいつぱい
に滴したたる赤さ

芽の麥の青き縞目しまめの縦横たてよこに赤々し冬ふゆの日は染し
みるなり

赤き日に黒き刺葉はりばの沁み揺るる柁ひらぎの根を人う
ちかへす

畑打てば閻魔大王光るなり枯木二三本に鴉からすち
らばり

鍬下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに眞赤まっか
な閻魔の反射

馬頭觀世音の前を通れば甘薯畑盲人こち向け
 日が眞赤ぞよ

盲人よ盲人一心に何か聴きすましあかあかし
 顔を日に向けてゐる

木がらし

はろばろに枯木わくれば甘薯畑おつ魂げるや
 うな日が落ちてゐる

隣の厨

寂しさに秋成が書読みさして庭に出でたり白
 菊の花

櫓をかつぎ漁人竈の前をゆくその櫓たちまち
火に照る赤く

圓^{つぶ}ら眼^めの童子かまどの前に居りあなひもじさ
よ焰^{をど}の躍^{をど}り

渚の西日

赤き日に彼ら無心に遊べども寂^{わらべ}しかりけり童
があたま

童子抄

何事の物のあはれを感ずらむ大^{だい}海^{かい}の前に泣く
童あり

ものなべて麗らならぬはなきものをなにか童
の涙こぼせる

朱のまろき大きき日輪海にありいまだいつくし
童^{わらべ}があたま

麗らなれば童^{わらべ}は泣くなりただ泣くなり大海の
前に聲も惜しませ

雪 夜

この庵にまこと佛の坐^{おは}すかと思ふけはひに雪
ふりいでぬ

冬^も青^ちの葉に雪のふりつむ聲すなりあはれなる
かも冬^も青^ちの青き葉

澄み入りてわが身ひとつにふる雪のはては音
こそなかりけるかも

めづらかに人のものいふ聲ぞする思ふに空も
明けたるならむ

見桃寺の鶏^{とり}長鳴けりはるばるとそれにこたふ
るはいづこの鶏^{とり}ぞ

雪 後

あかつきの雪に群れつつゆらめくは木々に轉
る雀があたま

木の枝に雀^{ひとつら}一列ならびゐてひとつびひとつにも
の言へりあはれ

三崎遺抄

相模のや三浦三崎は蕪の繪を湯屋ゆやの廂ひましに畫け
るところ

相模のや三浦三崎は屁の神を赤き旗立て祭れ
るところ

『輪廻三鈔』より

大正三年六月、我未だ絶海の離嶋小笠原にあり。妻は曩に一人家に歸り、すでに父母とよろしからず。七月我更に父母の許に歸り、ま

序

輪廻三鈔

たわが妻とよろしからず。我は貧し、貧しけれども、我をしてかく貧しからしめしは誰ぞ。而も世を棄て名を棄て、更に三界を流浪せしめしは誰ぞ。我もとより貧しけれど天命を知る。我が性玉の如し。我はこれ畢竟詩歌三昧の徒、清貧もとより足る。我は醒め妻は未だ痴情の戀に狂ふ。我は心より畏れ、妻は心より淫る。我父母の爲に泣き、妻はわが父母を譏る。行道念々、我高きにのぼらむとすれども妻は蒼穹の遙かなるを知らず。我深

く涙垂るれども妻は地上の悲しみを知らず。我は久遠の眞理をたづね、妻は現世の虚榮に奔る。我深く妻を憫めども妻の爲に道を棄て、親を棄て、己を棄つる能はず。眞實二途なし。乃ち心を決して相別る。その前後の歌。

風
懷

風高き椰子の葉末の月夜雲消いなば消いぬべし歸
るすべなし

我やひとり離れ小島の椰子の木の月夜の葉ず
れ夜もすがら聴く

護
謨
の
葉

護ご謨むの木の畑はたの苗木の重き葉の大きなる葉の
ふとひびらぎぬ

肉厚く重き護ご謨むの葉照り久しおのづからふか
き音たてにける

嶋の日永

日は暑し夏の野の椰子や子の葉しずれより木高きもの
 はあらしとぞ思ふ

ちちのみの父の嶋より見わたせば母の嶋見ゆ
 乳房山見ゆ

蒼空に向つて

蒼空あをぞらを見て驚かぬ賢さかしびと見ておどろけやい
 にしへのごと

ひさかたの四よ方の天雲地に垂りて碧あを々あをしかも
 蓋さぬがさのごと

幼子を見よ彼等あそぶと蒼空あをぞらの大圓蓋おほまるがさを我が
ものとせり

遙はろぼろし空を仰げばますらをのこぼるる涙と
どめかねつも

わが行ゆきはのどにはあらずよ白鷺うけの浮足あし吾妹わがもく
るしくば去れ

歎く妻に

天地あめつちを泣きくつがへし晝も夜も泣きひたすと
も我は貧しき

青山を枯山からやまになして泣きいざちて泣きおらぶ
とも我は貧しき

この父この母この妻

老いらくの父を思へばおのづから頭かうべふかく垂
れ安き空しなし

ははそはの母に向へばおのづから涙はふり落
ち答ふすべしなし

うち背そがひ妻を憎めば火と燃えて笑みひたせま
る大き眼めおもほゆ

ますらをと思へる我や貧しくて命はかけし妻
にわはる

別
れ

うつし世のちよろづごとの誓言かねごともむなしかり
けりわかれ去らしむ

わが妻が別れに置きし一言ひとことは眞實まことなりけりよ
く聴きにけり

これの世に家はなしとふ女子をみむこを突き放ちたり
また見ざる外とに

ぼとほとに戸を去りあへず泣きにけり早や去
りにけり日の暮れにけり

貧しさに妻を歸して朝顔の垣根結ひ居り竹と
繩もて

別後

この我や心いたらぬ女子をみをあはれとは思へ憎
みあへなくに

我を舉げて人をあはれと思ふ日のいつかは來
らむ遙かなりけり

蟹味噌

蟹を搗つき蕃椒たうがらしす挿り筑紫びと酒のさかなに嚙かむ
夏は來ぬ

この我や響するどき蟹味噌の辛子嚙かまずば慰
まずけり

子供の野球

球たまを打つ音のよろしさ聞くさへや心は晴るる、
悔しき時も

球たま投ぐる振ふりのよろしさ見るさへや心はをどる、
苦しき時も

眞まっ向かうより飛び來きたる球たま待ち構ふる張りきらむず
る立ちの雄々しさ

童わらべこそはひたむきなれ火のごとく飛び來きたる球
をかんとうち放す

童こそはひたむきなれ火のごとく飛び來る球
を身をそらし取る

童こそはひたむきなれ傍目いさめふらず飛び逸それ球
をひた走り追ふ

満月と鴉

眺むれば満月光に飛ぶ鴉一羽二羽三羽四羽五
羽六羽

鴉飛びて朱あけの満月過ぎるとき鮮あざかに見えつ太
き嘴くちばし

良夜

圓まどかなる月の光のいはれなくふと暗かりて來
る夜ふけあり

月の夜の白き天霧あきりもくもくとながれて盡きず
 夜灯あかりの上

發電機

眞夏まなつ日の光はげしく闌たけにけり耳に入り來る
 發電機ダイナモの音

ああ發電機ダイナモおほどかなれどおのづから澄みて
 妙なる聲放つなり

發電機ダイナモの音聽けばこもごも忘れぬそのかの
 聲もこもらひにけり

雨ふれば

雨ふれば青き御空みそらぞなつかしきその青空も寂
しと思へど

麗日

摩耶まよの乳ちち長閑のどにふふますいとけなき佛の息も
ききぬべき日か

澄みわたる光のなかをゆく鴉かあと一聲啼き
にけるかも

麗らかに頭まるめて鳥の聲きいてゐるといふ
心になりけるかも

『雀の卵』より

ひと色に黒くにじめる冬の山雨過ぎぬらし竹
のみな靡く（墨畫を見て）

おのづから水のながれの寒竹の下ゆくときは
聲立つるなり

竹と山水

そぼ濡れて竹に雀がとまりたり二羽になりたり
りまた一羽来て

いそがしく濡羽つくろふ雀ゐて夕かげり早し
四五本の竹

雀の藪

深藪ふかやぶに人家じんかの燈あかりあかあかと入りとどかねば啼
かぬ雀か

蛇窪村

しみじみとつめたき朝はとく起きてこちごち
の畑はたに人は火を焚けり

閻魔の咳

冬の光しんかたるに眞竹原閻魔大王の咳と
ほる

澄みとほる青の眞竹に尾の觸れて一聲啼くか
藪原雉子

山内の時雨

三縁山増上寺の朱の山門にふる時雨日がな日
ぐらしふりにけるかも

松が枝ともみぢの枝にふる時雨松には松雀も
みぢには鴨

厨邊の霜

今朝見れば置く霜濃くて厨邊のごみための影も紫に見ゆ

霜かぶる蕪がそばに目つむるは深むらさきの首長の鳴

麻布十番

この夜ことに星きららかに麻布の臺霜下り來らし聲霧らふなり

常青き堅木常盤木その葉落ちずいよいよ経れば霜下りにけり

寒天に吹きさらさるるいちゐの木いちゐひび
けりふがき夜霜に

この夜ごろ物の音牙えぬ巷邊の濃霜の凝りか
置き深むらし

雪夜

大王おほぎみの行幸みゆきかあらし旗立てて雪の御門みかどを騎馬
出づる見ゆ

白牛

瓦斯の燈ひに吹雪かがやくひとところ夜目には
見えて街遙かなる

吹雪やみて月夜明りとなり
にけりおほに湧き
起る牛の遠吼

笹の雪

雪けぶり立てて幽かに飛ぶ
雀笹の葉の間に羽
たたけり見ゆ

雪 曉

目のさめてややにふえゆく
雀の聲あなあはれ
我も目はさめてゐる

人間のこゑ湧きおこるしのめどき
すなはち
來る新聞くばり

浅草の雪

金龍山浅草寺の朱き山門の雪まつしろに霽れ
にけるかも

路次の朝

硝子戸をさやに拭きこむこの朝明隣の雪が目
の傍に見ゆ

雀飛ぶ屋根の遠見の雪煙かすかに射すは朝日
のかげか

屋根の雪霞みて暗き遠方はやや煙らへり風か
吹きいでし

雪煙ちらし蹴合へる組み雀ばたと立ちたり庇
まで来て

ほのかなる降りなりしかど椎の葉に一夜積み
たる雪のうれしさ

夜明の鶴

かうがうし鶴はこの世のものならず幽かに啼
けば生きてるらしも

嘴ほそき鶴の一羽は見上げたり雪の氣霧らふ
空の暗みを

春泥の上に求食れど腰ほそく清らなるかな鶴
の姿は

鶴といへどひもじくあらし松が根の凍れる苔
に嘴はしつけにけり

茶の煙

茶の煙幽かなれかし幽かなる煙なれども目に
染みるもの

山家抄

雪ふれば御獄み精進たけもえは行かぬ凄じき冬に今
はなりにけり

寂しさに堪へて眺むる白雪のほのぼのとして
山家なりけり

奥山の山の狭間にふる雪のほのぼのつもり夜
明けぬるかも

寂心

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅あかき生薑の
根をそろへけり

春のめざめ

おのづから睡眠ねぶさめ來るたまゆらはまだほの
ぼわらはのし童こごころ

朝目ざめ朱墨つきたる掌てのひらなどしみじみと見つ
つ起きむともせず

鈴 蘭

本草ほんざうのさびしき相さうのその中にことに寂しきは
深山みへま鈴蘭すずらん

現世の身の成果もおもほえて寂しとぞおもふ
深山鈴蘭

沙羅の木

鷗外先生の庭

さすたけの君が御庭の沙羅の花夕かたまけて
見ればかなしも

人みなが

人みながわれをよろしといふ時はさすがうれ
しゑ心をどりて

人みながわれをわろしといふ時はさすがさぶ
しゑ心ほそくて

米の飯

現身うしの人の日ごとに取り馴れて食たぶる飯を我
も食たぶる

日に常に食たべなれつつ米の飯やうましと思も
はね我あも飽かぬかも

とり立てて味は香かはなし米の飯ただ嚙みしめ
ていよよ知るべし

うき世

青空の山のかなたに人住みてあぐる煙の世に
もかそけさ

石版職工

人皆の眼まほこおどろき見てを居り人のひとりの描
く花蓮はなはら

あかあかと蓮華描かくとて描かきゐたり我も蓮華
と見てゐたりけり

父と母

あなかそか父と母とは目のさめて何か宣のらせ
り雪の夜明よあけを

あなかそか父と母とは朝の雪ながめてぞおは
す茶をわかしつ

あなしづか父と母とは一言ひとことのかそけきことも
晝ひるは宣のらさね

ちちのみの父のひとつの楽しみは夜に母刀自
と書ふみ読よますこと

母刀自が父のみことの讀ます書ふみあなおもしろ
と聞かす楽しさ

あなかそか父と母とのふたはしら早や寝ねま
しぬ宵の寒きに

母父おもちちの生みの御親のふたはしら寂しからせと
子は祈らぬを

父母とその子

父母の寂しき閨の御目ざめは茶をたぎらせて
待つべかりけり

さざめ雪窓にながめて母父おもちちと浮世がたりをす
るが寂しさ

父母と摘みてそろへし棕櫚の葉に霰たまれり
米の粒ほど

父母と今朝もたばしる白玉の霰のさやぎ見る
が幽けさ

老いし父母

老いらくの父に向へば嚴かしき昔の猛さ今は
まさなくに

ははそばのこれや我が母我がどちのこのよき
母も老いましにけり

貧しき食膳

しみじみと眼を見合せて親と子が貧しかりけ
り飯をひろへる

葱のぬた食^をしつつふとしこの葱は硬き葱ぞと
父の宣^のらしつ

母の深き吐息きくとき子の我や母のところに
ひたと觸りたり

「童と母」反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲
團をたたかれ

春日遊樂

鞠もちて遊ぶ子供を鞠もたぬ子供見惚るる山
さくら花

うつり香

ははそばの母のころもは母の香ぞするちちの
みの父のころもは父の香ぞする

柳河の玩具

雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母
し雉子の尾ぐるま

竹屋の木蓮

竹河岸の竹の櫓やぐらの春寒し細かに見ればその尖さき
の揺れて

ひしひしと繁しみみ立てたれ竹の尖はは突きぬけて
寒し並倉の上に

白木蓮花

白木蓮の花の木の間まに飛ぶ雀遠くは行かね聲
の寂しさ

薄ぐもの春のけはひのつれなくてきのふけふ
白き街の木蓮

白木蓮の花のあなたの汐曇むらさきふかし今日も去ぬらむ

白木蓮の花の木かげのたまり水いつしか青き苔の生ひにけり

『葛飾閑吟集』より

薄野に白くかぼそく立つ煙あはれなれども消
すよしもなし

薄野

葛飾前歌

雀

朝ぼらけ一いつ天てん晴れて黍の葉に雀羽たたくその
こゑきこゆ

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見
居りその揺るる枝を

真間に移る

葛飾の真間の繼橋夏近し二人わたれりその繼
橋を

葛飾の真間の手て兒こ奈なが跡どころその水の邊の
うきぐさの花

住みつかぬ山の庵はけうとけどまたそぞろな
りひとび一日二日は

堪へがてぬ寂しさならず二人来て住めばすが
しき夏立ちにけり

この夏や真間の繼橋朝なさなゆきかへりきく
青蛙あながへるのこゑ

野ゆき山ゆき

おのづから心安まるすべもがと寂しき妻と野
に出でて見ぬ

鳩には鳥どりの葛かつ飾しか小野をの夕霞ねもごろあかし春もい
ぬらむ